

初折裏第十二

逝きしみたまへ甘茶供へむ

ヨシ子 春 述懐 釈教

初折裏第十三

子らの声舞ふや吹雪の花は八重

康一 春 【植物 人倫】

灌仏会の甘茶祭りが行われている境内は賑やかな子どもたちの声がします。折からの優しい風に満開の桜は吹雪となって花びらが舞い降りております。お釈迦様の誕生日四月十日は遅咲きの八重桜も開き、未来そのものである子ども達の将来を祝福しているようです。今を生きる子どもたちは歴史や文化や社会、科学を学ぶことによって、花咲く平和な世界の一員となって生きますように、との願いを花に込めて大人からのエールと理解しました。さて、このボックス連歌は最後一句を残すのみとなりました。今井連歌の約束事で挙句は「めでたくて春季を帯びて漢字止め」ということになっております。「漢字止め」とは名詞で終わることです。明治以降に日本語文法が体系付けられました。それをなした国語学者こそ現在の連歌バイブルともいえる「連歌方式綱要」「連歌概説」を著した山田孝雄（よしお）博士です。連歌での「体」「用」の用い方も納得が出来ますね。では奮って挙句にご応募くださいませ。七七で季は春で障りは述懐のみのようなです。

(次点句)

風やさし丘の傾に花盛る

なだり

精子 春 【植物 山類】

彼岸やお盆にお墓参りをするのはこの地方に限ったことではありませんね。外国の映画などでも何かにつけてお墓参りをする場面があります。前句「甘茶供へむ」場所は「丘の傾」にある墓地でしょうか。それとも甘茶を備えた墓地から眺める傾り一面は花盛りとの付けですでしょうか。穏やかで優しさにあふれた句ですこと。

地に還る甲を埋め花吹雪

かぶと

東三子 春 【植物】

「逝きしみたま」の眠るのは古戦場でしょうか。桜の木の下には骨が眠るとも。「花の下にて春死なむ」とも。また先の大戦で若者たちは桜の花が一気に散るように戦場での死を思ったとか。いずれにしても桜の花の美しさと儚さには心が揺れますね。

風吹きて花は大地に降り注ぐ

瑛 春 【植物】

精子さんや東三子さんの句と同じような前句との付けですね。ということ以下省略させていただきます。お許しを。

(講評)

匂ひたつ花の宴の密やかに

君子 春 【植物】

外出を控え、三密を避けるとなれば満開の花の香りに誘われたとしても、密やかな宴とならざるを得ませんね。釈迦像に甘茶を注ぐにも適度なディスタンスとマスク必着でとなり

ましようか。今しばらくの辛抱ですね。

風光る田の面広きに兎らの声

幸江 春

前句との付けは灌仏会が果て、境内から見下ろす広々とした田んぼには子供たちがあそんでいるのですね。子供の声は何処にいても、どこから聞こえてきてもいいものです。

見上ぐれば花ほころびて笑みの面

浩子 春 【植物】

前句「甘茶供へ」るお釈迦様の柔和な微笑と、とらえることにしましょう。そして頭上の桜の木は早やほころび始めていると付けたのだと取ります。しかしこの句自体は一句立っていないのです。何故なら「笑み」を浮かべている面の主体がはっきりとしていません。前の句をしっかりと理解し、それを生かす事によって付け句も生きるのです。座において自分の句に次の句が付くまでは席を立てはならないというのも礼にかなったことですね。